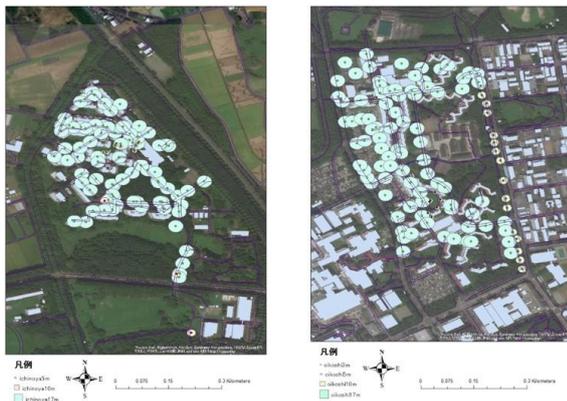


1、研究目的

現時点では、茨城県内の犯罪発生率ランキングでつくば市は3位という相対的に高い順位にあり、つくば市の夜間環境は相対的に暗い田舎部分と相対的に明るい中心エリア両方が存在する。筑波大学構内においても、田舎に囲まれる宿舎エリアと一般の町環境に囲まれた宿舎エリアが存在し、本研究は両方の安全性と居住者に与えられる心理的な不安要素を考察したい。

2、研究地域



3、研究方法

まず、GPS 端末を用いて両宿舎エリアの街灯位置座標をウェイポイントとして入手し、現地観察によりバッファの大きさを記録して Arcmap により地図化する。両エリアの照明特徴を観察する。

追越・平砂はの照明はもっと分散しているが、両エリアの道の部分は照明環境が良好だと判断できる。

そして両エリアの居住者に宿舎エリアにおける夜の不安要素についての聞き取り調査を実施した。

一の矢エリアでは13人、追越・平砂エリアでは27人の回答を収集した。

4、結果・考察

聞き取り調査の結果により、一の矢エリアで不安全を感じた報告は全体の62%を占める、追越・平砂エリアは52%を占めた。

不安全報告が発生した位置を以下の図に示した。一の矢エリアで最も顕著な不安要素は構外に出たら暗い、追越・平砂エリアは不審者に関わる不安が最も多く報告された。



取得した街灯状況により、両宿舎エリアは似たような照明状況を示した。

実際に発生した犯罪事件は追越・平砂エリアの方がさらに多い。しかし、居住者の主観的な判断により、一の矢エリアはもっと不安だと思われる。

聞き取り調査の結果により、照明だけは安全を感じさせる要素にはならない。

今回の調査で、不安全報告が多いエリアは主に二つの特徴がある。第一は森や廃墟のような一般人にとって未知な環境、第二は実際の犯罪事件が発生したところに近いエリア、同じ国籍の学生の間で SNS による不安の伝播も存在する。